

書評

佐々木啓一

「椎名麟三の文学」

辻橋三郎

「戦後派作家らしい作家として、最も典型的と称されている」のは、野間宏と椎名麟三と塩谷雄高の三人である。世界と人生との意味を問ひ直し、その根源的な問題に

探求の眼を凝集した「戦後派」文学のチャンピオンであった三人の作品は、今なお、多くの読者を吸収しているという。その折も折、新進佐々木啓一氏の本書が出版されたことは、まことに時宜を得た労作であり、企画であったといえると思う。

本書は、「作家論」と「作品論」とから成っている。「作家論」としては「太宰治論」が、「——〈椎名麟三〉へのアプローチ」として——というサブタイトルつきで冒頭にすえられている。そのあと、二つの「椎名麟三論」がならんでいる。

「作品論」の方は、「深夜の酒宴」「永

遠なる序章」「美しい女」「長い谷間」「牧師の娘」「善魔」という諸作品が、批評解析されているのである。

「太宰」論が、「椎名」論のプロローグとして展開されているのは、次の理由によっていると思う。奥野健男氏の太宰文学に對する「道化はかれの生きるための武装」であったという指摘を、太宰の方法の真髓として提示し、椎名論の結論の方向を示そうとしたのであろう。すなわち、「善魔」における主人公は、「道化した言動を通してイエス・キリストに深くかわって」いくのだが、「道化」という虚構の行為に、太宰にはじまる、椎名のイエス・キリストへの道程を展望している、佐々木氏自身の視点を示唆したかったからであらうと思われる。佐々木氏は、「道化」なるものの意味

を、キリスト教的な愛と庶民性の表現として、理解しているようである。（「牧師の娘論」）かくて、佐々木啓一氏の『椎名麟三の文学』は、文学者椎名麟三の、イエス・キリストとの邂逅と、イエス・キリストへの信徒のプロセスとの、追跡の記録といえるのではないかと思う。

したがって、この『椎名麟三の文学』は、佐古純一郎氏の文学とキリスト教との関連研究の特色たる、人生論の色彩をも具有していることは否定できないが、それとともに、「実存的弁証法」による人間像の創造という椎名の新しい文学方法への分析の試みともなっている。実存的弁証法という用語は最初理解し難い用語であったが、「透徹した理解力と強靱な思索力に加えて、危機的的人生経験と宗教的自由をもった、今日稀な実存弁証法の体得者」という久山康氏の椎名評（椎名麟三論——その思惟形式の原型についての一考察」に引用）によって、その方法を、一応、図式的ながら諒解することができた。さらに、本書が、これは、椎名文学それ自体の性格ながら、「美しい

女論」以後、キリスト者ならびにキリスト教会の現状批判の書となつてゐることにしても、一つの特徴があることも、否定できない事実であると思う。

以下、その各論について、紙数に制限もあることとて、杜撰ながら、その大要と批判を試みてみたいと思う。その前に、気になることを述べておくと、それぞれの論文がサブタイトルをもっているのはいいことだが、各論の冒頭に、例えば、〈愛憎の原点を求めて〉という題目のもとに云々、という極度に限定された問題提起が記されていることは、論文発展の可能性を限定する結果を招いてゐるのではないかと思われる。ただし、これが、わたくしの危惧であるならば、幸である。

先ず「深夜の酒宴論」だが、椎名が愛と憎との二律背反の一致に人間の至高の感情を見、生きてゐることは誰かを傷つけることだという真実を、ドストエフスキーから学んでいる点を指摘し、さらに、「美しい女」の原型たるお加代の謎のような微笑に、椎名の新しい認識（やがて神となるで

あろうところの）が予知できるとしてゐる。「永遠なる序章論」では、「愛憎の矛盾の中にある同時性——主人公の認識の内的弁証法」の展開を辿らうとしているが、いささか説明不十分の感があり、わたくしには十分に理解できないところがあつた。佐々木氏は、総合とか、弁証法という用語を多用しておられるが、ときどき、意味不鮮明、不妥当な点もあるように思われるのは、わたくしの不明によるのであろうか。高橋和己氏が、この作品の忍耐の思想を高く評価したことに示唆されて、佐々木氏も、椎名が、この作品において、「不断の死と対決すること」で「愛憎をこえ」た「内的弁証法」を体得し、「徹底的に生き抜くこと」が、「庶民の生活の一つの根拠」であるとしたことの指摘は、以後の椎名の思想の展開を暗示した結論であつたといえよう。

「美しい女論」は、初出本と単行本との比較から立論している点、本書中、最も実証的といえるのではないかと思う。その点、わたくしの趣味にも適い、わたくしとしては、最も感動を伴つた論文であつた。これまで、この作品は、初期の椎名文学においては、無意味、愚劣として貶斥した日常性を再評価したものといわれて、評価の二分された作品であつた。たまたま、この作品を頂点のようにして、日常性への埋没化現象が戦後派文学幻影論の根拠となつたのであつた。佐々木氏は、この日常性——平凡さのなかに、キリスト者としての自由のよみがえりを読みとつてゐるのである。すなわち、この作品を執筆するに当つて、椎名は何度も実地踏査を行ったとのことであるが、椎名によると、この踏査自体が、キリスト者の自由の確認のためであつたといふのである。要するに、平凡さの中に、真のキリスト者の生き方を見出したのであり、そのことは、キリスト教会へのプロテストでもあつたといふのである。こうして、この作品をもって、佐々木氏は、はっきりと、椎名を本格的キリスト教文学の作家であると断言しているのである。

「長い谷間論」は、〈終末の幻想体験を求めて〉というサブタイトルをもつて、問題を冒頭に提起されている論文である。こ

の一文は、ドストエフスキーの内的外的リ

アリズムの同時性の上に構成された作品である、佐々木氏はいう。すなわち、キリスト教的な愛による連帯感の上に立つ作品というのである。しかし、わたくしがこの論文で強く印象を受けたことは、「ほんとうの愛はキリストにおいてしか成立しない」とみる椎名の觀念の根源には、教会というキリストへの媒介項を離れて直接にキリストを交えて人間らしい集団を造ることが可能であったなら、という温かい意識が心情として常に働いていたのではあるまいか。」というところである。これは、椎名文学を通しての、佐々木氏のキリスト者としての純粹な心情を告白した一節と考えていいのではないかと思う。

「牧師の娘論」は、キリスト者の原点を求めて」という題目において、論述されている。ストーリーは、牧師の娘が家出をしてきて、主人公に相談に乗って欲しいというものである。そして、この作品において続出している、牧師と教会とへの批判について、佐々木氏は次のように述べてい

る。

「私見であるが、例えば牧師が説教でいかに『放蕩息子』の喩』を示して信者に訴えたことがあったにしても、現実には己の手元から迷い逃げた一匹の子羊すらも救えないでいる。否、むしろ教会は、完全に近いかたちで拒絶したに違いないのである。教会というところは、えてしてそういうところなんだという大きな矛盾を訴えたかったのであろう。」

「この〈私〉」（作品の主人公のこと——辻橋注）の控え目な推測は、少なくとも教会の経営維持と自己の保身にのみ憂き身をやつす牧師に浴びせる〈私〉の冷水に等しいものであったことはいうまでもない。そして同時に、その矛盾は組織と個人にかかわる社会的矛盾をも示していたに違いないのである。」

さらに、佐々木氏は、椎名の原文の次のような個所に傍点をふっているのである。

「神にかかわる人間は、身近かにいる人間の人間性を逆にゆがめてしまふ場合もあるといふ事実に気付いたからである。（中

略）『神様って実際こわいな』と私は思わず呟いた。」

要するに、人間は往々にして、人間の苦悩、絶望に共感をもたなくなり、相手の魂との接触を怠り、柔軟な人間性を欠落し、人々を徹底的に裁こうとすることが、逆に身近の人間の人間性を歪曲するというのである。そこから、佐々木氏は、

「教会が、そして牧師が私たちが人間の不信仰を糾弾する前に、己れ自身がその共感を根拠とすることをはっきり認識すべきである。いかなる神学上の深い教理も、それを表現するいかなる用語も一方的な自己満足、自己陶醉、そして自己欺瞞に終始する場合が多いのである。」「宗教のもつ人間不在の厳しい現実に接した今、〈私〉は、隣人愛を説く教会が、そして牧師が、結果的には隣人に対する愛そのものを厳しく拒絶している現実程悲しいものはないと判断する。」

と、論旨を展開しているのである。これらを見ると、「牧師の娘」が、現在の日本のキリスト教、キリスト教会の精神的貧

困への批判とプロテストとを、目標の一つとした作品であることを、われわれは教えられるのである。また、「神ってこわい」という作中人物の感動の中に、「神」を罰を下す存在とみる土着的な神観とキリスト教のそれとの、何らかのつながりを見出すところには、佐々木氏の宗教論の展望の一端をうかがい得るように思つた。

次の「——へ宗教家の俗物性の原点」を求めて——というサブタイトルつきの「善魔論」こそ、椎名のキリスト教、キリスト教会論のクライマックスといえよう。

この「善魔」のモデルが、昭和二年一月、椎名に洗礼を授けた赤岩栄牧師（共產主義を容認している）であることは、周知の事実である。この「善魔」については、笠原芳光氏の一文が紹介されているが、佐々木氏の立論は、おおむね笠原文の示唆が多いようにに思われるので、一応、笠原文を転載しておく。「最近の椎名の言説はそれまでの正統主義的キリスト教への批判から転じて、むしろ赤岩流のキリスト教理解

に対する揶揄と攻撃に力が注がれているような感がある。『善魔』のような明らかに赤岩を諷刺した小説や『上原集団脱出記』という文章を書き、教団の雑誌などに執筆している椎名麟三の現状は永遠に探求の思想である。実存主義の作家というよりも、形式的にキリスト教の作家となりつつあるのではなからうか。」さて、佐々木論文は、椎名が、偽善的な主人公の耳に「坊主になって出直せ」という声を響かせて、(1)絶対性を強いる主義・主張への激しいプロテストを示すとともに、(2)人間における本当の救済というものは、死そのものから自由になることだということを強調しているといふのである。そして、その声こそ、復活のキリストからの声であると指摘しているのである。こうして、冒頭に記した如く、道化師のような主人公を通して、キリストと人間とのかかわりを、椎名文学から剔決してみせているのである。

彼のこのような作品論は、「——その思惟形式の原型についての一考察——」、「——病苦を原点とした思索の歪みとその

表現構造について——」という、それぞれサブタイトルをもった、二つの「椎名麟三論」という作家論によって基礎づけられているのである。

前者は、(1)椎名の思想の原型は、一匹の蜘蛛がきまぐれな風の吹いてくるのを待っており、風に任せて網をはるや否や、虚無という毒牙で現実の現象を捉えるというように比喻し得るものである、(2)椎名の思想は、その数奇な生い立ちに原発想をみる人が多いが、その家出以後の学習と経歴と思索によるものである、という論旨のものである。要するに椎名は、へ虚無と死への緊張関係の連続の中で、「自己の幸福と自由の場所を探し求めてへ一つの精神」の網を幾度も張っては破られて歩いてきた、それは、「誤解をまねく程、巢をつくる場所」を変えてきた、しかも遂に、「恐らく僕にとつては、永久に一つの名のもとに自己の自由と幸福を見出すことがないであろう。その名が人の名であるかぎりに於て。」という、椎名自身の告白にならざるを得なかったというのである。佐々木氏は、そこに、やが

てイエス・キリストとの対決の予感を読み
とっているのである。

後者は、椎名の実存的、観念的方法是、
病苦（心臓疾患）を原点としていたという
一文である。椎名が、人物も徹底的人物を
取扱わず、思想も、絶対化を忌避してい
るのは、その病苦に原因しているのではない
か、そして、従来の彼のキリスト教信仰の
中核をなす復活のイエス・キリストも、根
拠は「案外このような病苦の馴れの中で釀
成」されたのではないかという点など、行
きとどいた考察ということができよう。

要するに、佐々木啓一氏の『椎名麟三の
文学』は、椎名文学の構造の分析、椎名の
キリストとの邂逅と入信の過程の追究、椎
名（さらに椎名を媒介とした佐々木氏の）の
キリスト教、信者、教会論という、三つの
側面をもった論文集ということができるの
である。その意味からいえば、「椎名文学
の思想」という題名の方がふさわしい気も
するのである。また、新しい問題提起も行
っており、類書絶無の点と、誠実な問題追
求の姿勢とに高い評価が与えられて然るべ

きものと思う。

ただ、瑕瑾をいわせて貰えば、第一に本
文でもふれた通り、冒頭に、限定的な問題
提起を行ない、展開の可能性を制限してい
ることである。第二に名著である吉村善夫
氏の『椎名麟三論』への言及のない点など、
資料的に幾分、その調査に不足を思わせる
ものがないでもないことである。第三に、
佐々木氏が、思索力と論理追究の能力とに
恵まれておられながら、往々にして、そ
の能力への過信から、時に、晦渋、難解
な部分も少なくないことである。第四は、
これも本文でふれた通り、第二に関連する
ことながら、弁証法という言葉の多用が、
論理の空転をもたらししていることである。
しかし、まだ若年の氏にして、椎名のよう
な複雑な構造をもつ作家と作品を、かくま
で、立体的に、鋭角的に、縦横に論破され
たことに、私は、万腔の敬意を払いたいと
思う。今後の精進を、心から期待したい。